

### <研究室余滴> 「水」の問題の今日的意義

カヤノ, ハルオ / 栢野, 晴夫 / KAYANO, Haruo

---

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Society and labour / 社会労働研究

(巻 / Volume)

1

(開始ページ / Start Page)

171

(終了ページ / End Page)

172

(発行年 / Year)

1954-01-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00017343>

## 「水」の問題の今日的意義

栢野 晴夫

日本農業における「水」の問題の歴史は極めて古い。「水」が日本農業の支配的形態である稲作経営にとつて、第一義的な重要性を持つてゐることは云りまでもないがそれだけに、この「水」の確保の爲には、農民は命をかけて争つてきたし、現在も亦争つてゐるのである。処で、問題は、この争い方にあると云わなければならない。

水稲のあるところ、水争いが未だ曾つて起らなかつたためしがないと云われる程、広く深く且つ劇しい斗争の契機を内包してゐる「水」の問題が、現実争われる場面に出くわすと、それは殆んど全部と云つてよい程、村と村の対立、或は部落と部落の対立という形をとつて現われる。だから「水」の問題には階級性がない、「水」の問題はそれ以前のいわば村落協同体の問題であると結論をする。

「水」争いには、地主も自作も小作も部落争つて、水上なり水下なりの部落と対立するのであつて、地主と小作という様な争いとは違ひますと、農民自身も答える。嘗つて、あれ程劇しく斗われた小作争議の中にも「水」の問題が直接契機になつてゐるものは殆んどないといつてもよいであらう。

併し、この様な理解の仕方の誤りは、重要である。「水」が共同体的な性格をもつてゐることは勿論否定しないとしても、正にそのことの故に、地主制とかわりがないという理解は、地主制そのものの理解の仕方にも、共同体の理解の仕方にも誤りがあると云わなければならないし、ひいては「水」の問題を契機とする農民斗争の意義についても重大な誤りを冒すこととなる。これらの點については別論を要するが、

ここでは、如何なる「水」争いの場合でもそれが一見、地主・小作の共同戦線によつて、他部落のそれと死斗をするという形で行われたとしても、結局、ことの勝ち負けに拘わらず部落で最終的に何が一番守られたかといふことを考えなければならぬことを指摘するに止めておこり。そこで確保されるものは、終局において地主制の下では、地主の懐に入る「小作米」以外の何ものでもなかつたのである。この場合、個々の地主の勝ち負けがあつたとしても、そのこと自体は地主制を単に、個々の地主の機械的集合体であるという様な素朴な誤りを冒さない限り問題ではないであらう。

「水」の地主的支配の本質を掴むことは農地改革後の地主制を考える場合、一つの重要な手がかりでなければならぬし、従つて、改革後の農民運動にとつても見逃すことのできない問題である。このことも亦詳しい分析を必要とするであらうが、更に今日「水」の問題が一段と複雑な、しかも日本の危機に直結した形態をとつて新しく現われて來てゐることに注目しなければならぬ。

らない。それは、所謂「総合開発」に名を借りた「電源開発」に外ならない。

今日、日本の主要河川の殆んど全部が膨大な電源開発の対象となつており、既に多くのものが強行着手されている。云う所の電源開発が、現在何を物語るかは、日本再軍備に熱狂している内外の独占資本が、その片手で同時に「電源開発」を強行していることを考えれば自明であろう。ところでこれらの河川は又、農業水利にとつて、日

本の農業・農民にとつて、死活的意味をもつている。だからこそ、現に、「水」の今日的争いは「電源開発」を回つて農民との間に数多く起つていふことも知らなければならぬ。その問題性は正に「基地」的意味を持つている。しかも、その農業における「水」の問題は、今日依然として釜上の様な混乱と問題点をもつている。此処に「水」の問題の今日的困難性があるとも云えよう。

いづれにしても、我々は日本農民組合がその第七回大会で「全農民的な斗いの高まつてきた今日の情勢のなかで、特にわが日農が自らを大きくし強くして、すべての農民斗争の中心勢力に発展するために重点をおくべき主な斗い」の第二に、「軍事基地軍事ダム、軍用道路、電源開発、総合開発等にたいする反対斗争」を掲げていることの今日的な意義を、捉えなければならぬであろう。

(一四五頁より續く)

する手がかりになりはしないかと考えられる若干の点を、簡単に列挙するに止めたい

(イ)「生産力(生産手段)と生産関係」という概念の弁証法」(同上「経済学批判」序論 第四節)。また「この社会的生産関係は物質的生産手段すなわち生産力の変化と発展とともに、変化し轉化する」(「賃労働と資本」第三節)——この場合の「生産手段」の意味をどう考えるか。

(ロ)「ブルジョア階級は……生産諸力を作り出した。自然力の征服、機械装置、工業や農業への化学の応用、汽船航海、鉄道

電信、全大陸の耕地化、河川の運河化、地から湧いたよりに出現した全人口——これほどの生産諸力が……。……ブルジョア階級の成長の土台をなす生産手段や交通手段は封建社会のなかで作られたということ。この生産手段と交通手段の発展がある段階に達すると、封建社会の生産や交換が行われていた諸関係、農業と工場手工業の封建的体制、一言でいえば封建的所有関係は、そのときまでに発展した生産諸力にもはや適合しなくなつたのである」(「共産黨宣言」國民文庫版 三三頁)

(ハ)「労働手段はたゞに人間の労働力の

発展の測度器であるばかりでなく……」(前出)

(ニ)「生産の変化と発展とが、いつでも生産力の変化と発展、なによりもまず、生産用具の変化と発展からはじまる」(「辨證法的唯物論と史的唯物論」一二五頁、傍點—引用者)

(ホ)「一つのテクノロジーの批判的歴史でも……」(「資本論」第一部、第三章註八九)特に(ニ)その他との関連において一般的には問題を技術論とのつながりにおいてとらえること。